

---

# 天気雨、ただし夜

山波太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天気雨、ただし夜

### 【Nコード】

N2128Q

### 【作者名】

山波太郎

### 【あらすじ】

病院の屋上にて煙草をふかしていると、空から雨が降ってきた。

天気雨が降った。ただし夜だ。太陽はない。

月明かりで感じるそれは漆黑で、光が足りなければ雨はこんなにも暗いのだと実感させた。

屋上に出ていて、濡れるかと思ったけれど、そのまま手すりにもたれて空を見た。星座を結べると良かったが、あいにく北斗七星しか知らなかった。しかもそれにしただって数ある星の中で、どれだけがその七つなのかということを判別できない。

雨は勢いこそなかったけれど煙草の火を消すには十分だった。まだ半分ほど残っていたが、火元にちょうどやってきた雫に消されてしまった。消えるときはなんとも情けない音を出した。まだ吸い足りなかったなのでその煙草にライターを当てたが、湿気ってしまったようで、もう火はつかなかった。

ため息をついて、それでもまだ吸いたかったので、服のポケットから箱を取り出してきて、また吸った。目線は下の街明かりに移っていた。

半分ほど吸ったところで、唐突に雨がやんだことを感じた。

何事かと思つてまた上を見ると、自分のすぐ頭上がビニールで覆われていた。売店で売られているような、安っぽい傘であった。

誰が差してくれているのかと思ひ振り返ると、若い看護師が立っていた。

その看護師が言う。

「えっと、禁煙です」

少しばかり謝罪の意を表して、でもここで副流煙の問題はないことを訴えると、そういう問題ではなく規則だと反論された。そう言われては返す言葉もないので、仕方がなく、携帯灰皿で煙草をのみ消した。

「それから」と看護師はまた言った。「雨、降ってますけど」

「見たらわかりますが」

「入らないんですか？」

「気分じゃないんですよ」

「でも……風邪、ひきますよ」

看護師のその言葉を曖昧にぼかした。「それにしてもどうしてここに？ 傘持って」

「いや、向こうの棟にいるんですけど、その患者さまが教えてくれたんですよ」

「なんて言って？」

「向かいの屋上で誰かが煙草を吸ってるって。雨降ってても中に入らないし、ひよっとしたら飛び降りるんじゃないかって」

全く思いもよらない心配だった。それを見ず知らずの他人がしていると思うと少しおかしくて、嘔きだした。

「笑いごとじゃありません」

看護師はいらつかせたように言った。

「その患者さん、どこにいるんですか？」

「一応、守秘義務というものがありますので」

無然とした態度を示された。

なので適当に向かいの棟へ手を振ると、窓辺にて手を振り返す者がいた。米寿手前ごろの老婆だった。

「あの人？」

大きな鼻息で以て返された。それを正解への判断とみなした。

「いい加減、中へ入ってもらえませんか？ 院内で病人を出すわけにもいかないですし」

目の前にいる人物が患者でないことは察してわかるようだった。そんな面をしてなければ寝巻でもない。患者と判断するには聊か要素が足りないでいた。大方、誰かの付添にでも思われているのだろう。間違っているような、間違っていないような。

「でもまあ、暇なんですよ」

「暇ってなんです」

「待ってるんです」

「誰を」

「親父です」

「だったら他のところでも待てるでしょう？ わざわざこんなところで待たなくても」

「携帯の番号を教えるのであるので終わったらかけてもらえるんですけど、ほら院内つて禁止でしょ？ 携帯電話」

今度は規則だなんて言われなかった。

「許可されているスペースもありますので、そちらで待ってもらえば」

「気分じゃないんです」

「気分つて」

「いやね」困ったように眉を寄せることになった。「親父、今死んでるんですけど」

現在進行形の言い方に看護師は混乱したようだ。しかし出てきた言葉が言葉だけに容易に聞き返すことができない、といった風であった。

「ほら、人が死ぬと中の物が出てこないように、詰めてくれるでしょ？ 綿」

鼻にそれを詰めるようなしぐさをした。実際に見たわけでもないの  
で想像であつたけれど。「一時間くらいつて言つてたんで、もうそろそろなはずなんですけど」

時計を見たら一時間経つまであと十分ほどだった。

「それは……」

中に入りたくない気分というものがどういふものなのか判断したのか、看護師は声を詰まらせた。

「ただね」

これだけは言っておかねばと思った。下手に同情されたのではかなわなかった。

「冷静に考えて。悲しくないんですよ」

看護師は疑問を持った表情をした。疑問に思えるということは、きっと良いことなのだろうと思った。

「悲しくない？」

「ええ、悲しくない。一言でいえば、ロクでもないやつだった、ってことですか。いつまでも子供の心を持っていて、夢を追う人で、他人に迷惑ばかりかけていた。そんな人だったら、救いに、誇りに、『ロクでもないやつだった』って、胸を張れるんですけど。あの人の目は濁ってばかりいた」

下手に同情されて、あの人を善人にするわけにはいかなかった。

「具体的にどういう人……だったんで？」

エピソードになるものを探した。が、いざ探すとなるとなかなか見つからない。少し時間がいった。

「まず、お礼は絶対に言わなかったですね。住んでたところは隣町の田舎でしたから、近所付き合い合というものが割と多い。で、『田んぼの水が十分だったから栓をしておいた』と近所の人が言ってきたら、財布を持ってきて、いくらほしいんだ、と怒鳴る。それから人からお願いされたこともやらない。火の用心って鉢鳴らしながら夜回りするのがあったりするんですけど、当番だったとしても、やらないんです。義理がないって。まあ、とにかく他人との接触を嫌うような人でした」

看護師は無言だった。だから続けてしまった。

「それで回っていくのなら、それも個性かなって思えるんですけど、それで回らない。一人じゃ何にもできない人だった。それがねえ、どうしようも腹立たしい。看護師さんたちにもだいぶ迷惑かけましたし。噂になってたみたいでしたけど」

「あ……」

喉で鳴らしたような、そんな声で看護師は厭な顔をした。

「わかりましたか、親父のこと」

「いえ、うん、守秘義務があります」

「もう死にましたけど」

「永遠に適応されるものですから」

守秘義務とやらがどれほどまでの適応期間を持つか知らないが、そうしたのならば、それはこの看護師の優しさだと思った。

「でね、迷惑ばかりかけて、葬式、誰か泣いてくれる人いるのかなって考えてたんです」

「いるんじゃないですか？」

「いないと、思います。面と向かって言われたことがあるんですよ。『あんたも大変ね、早く死んでくれると楽になるのに』って。言った人は笑ってたんで、冗談のつもりだったんだろうけど、冗談でもそういうことを言われる人に、泣いてくれる人がいるんでしょうかね」

「あなたは……？」

「泣けません。悲しくないんですよ、実際。それがどうしようもなく、ね」

心象を言い表す言葉が出ないでいた。

「それでも、だれか一人くらいはいるんじゃないんですか？」

「それを探してるんですよ。お袋は早くに他界しましたし、親父には弟がいるんですが、その人は親父をやっぱり憎んでいるらしくて、ここまで他人から死を望まれる人がいたということ自体が悲劇だ。『お袋はあんなに好かれてたのに、それでバランスがよかったのに、性格のよい人が早死するのは本当のようで』

ズボンのポケットに入れた携帯電話が振動しました。ディスプレイにはこの病院のとある職員の名が表示されていた。終わったのかと予想して出ると、やはりそうだった。

「終わったとのことです」

目の前の看護師にそう言った。その看護師は節目がちになっていた。

「そうですか」

思ったよりも時間がかかった。傘を差していてくれなければ、きつとずぶ濡れになっていた。

「ありがとうございます」

濡れずに済んだこと、そして話を聞いてもらったことの二つに対して、お礼を言った。

「いえ、それほどのことは……」

二人して昇降口に向かった。

「ただ」看護師は言った。「寂しい人だったんですね、あなたのお父さん」

「寂しがるような人じゃないですよ、残念ながら」

「ええ、ですからそれも含めて、寂しい人だったんですよ、たぶんご理解のある人を亡くされて、一人になってしまつて、本当に一人になってしまつて、そして誰からも惜しまれずに死んでいったんです。それをそばで見っていたあなたは、お父さんにいつまでも子供ような心と夢を持っていてほしくて、そうじゃないですか？」

その問いには言葉を返すことができなかった。

「きつとあなたはここで、お父さんを必死に弁護していたはずですが、でも弁護できるだけの思い出がなかったんでしょう。今言ったことは私の勝手な想像ですけど、もし本当なら、その人は孤独で、寂しい人だったんです。もしそれがわかっていたなら……なんて言うても、もう遅いですけど」

それさえも寂しいと形容すべきか。親父は種々の孤独、寂しさの中で死んだ。

全て遅かった。

そうした中で死なせてしまった。残るは悔恨だった。

葬式には二日早く、死んで泣く人間を一人見つけた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2128q/>

---

天気雨、ただし夜

2011年1月16日22時10分発行